

社会復帰に向けての関わり

～つながりの再構築～

黒木記念病院 ソーシャルワーカー 森野 早央里

1. はじめに

当院は大分県別府市にあり、一般急性期医療から回復期リハビリテーション、慢性期医療、在宅医療までを担う「ケアミックス型」の病院である。

今回、無保険状態、戸籍不明・住民票登録なし、近親者など親族関係不明確の状況下において、回復期リハビリテーション病棟に入院となった患者へのソーシャルワーク実践について報告する。

2. 事例紹介

80歳代女性。入院前はADL自立しており、アパートにて独居生活。X年〇月△日、大家が本人の異変に気づき救急要請。A急性期病院へ救急搬送となり、脱水症の診断あり。同日入院となるが、無保険、戸籍不明・住民票登録なしの状態であり、搬送時の本人所持金はわずか5円であった。

X年〇月△+1日、廃用リハビリテーション目的にて当院入院となり、医療ソーシャルワーカー（以下：MSW）の介入依頼あり。

3. 倫理的配慮

本人（対象者）に研究内容、個人の特徴が不可能となるようにプライバシー保護を遵守することを説明し、署名をもって同意とした。

4. 経過・結果

入院当初、リハビリ時間以外はカーテンを閉め切り病室にすることが多く、病棟スタッフや他患者へ自ら話しかける様子は見受けられなかった。また、感情の表出も乏しい印象だった。本人との面談で、入院前の生活状況や現在不安に思っていること、今後の意向についてアセスメントを実施した。

その結果、今後の生活について漠然とした不安を抱えていることや、入院費の心配をしていること等がわかった。また、大家より家賃を滞納しているとの情報があり、B地域包括支援センターと協働して生活保護の申請、退院後の生活環境を整えるために介護保険の申請を行った。

徐々に閉め切っていたカーテンが開いている日が増え、生き生きとした表情がみられるようになっていった。ある日、本人より「アパートには帰りたくない、1人は寂しい」といった意向が聞かれ、MSWと共に数ヶ所施設見学を行った。

本人が希望する施設入所に向けて、C市役所生活保護担当者へ本人の戸籍調査を依頼。その結果、戸籍の所在を確認することができ、C市に住民票を登録。施設へ入所することができた。

5. 考察

入院当初、様々な社会的問題を抱えており本人はパワーレスな状態であったと推察する。ソーシャルワーカーの視点である「人と環境との相互作用」に目を向け、退院後の安心した生活のために環境作りを行った。本人と共にソーシャルサポート・ネットワークを再構築することができたと考ええる。

【参考・引用文献】

公益社団法人日本社会福祉士会『基礎研修テキスト 上巻』、2015年